

京極読書新聞 <第25号>

発行日 平成23年 8月 1日(月)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2011

第4回

今年度の「京中生にインタビュー」、無事終了。今年
は新校舎でのインタビューということもあって、毎回通う
のが楽しいインタビューでもありました。<編集部>

坂本 明日美さん(3年生) 「ノーと私」 吉川 睦美さん(2年生) 「恋空 ～切ナイ恋物語～」

——坂本さん、去年の「天と地を測った男」(最優秀賞)に続いて、今年も受賞ですね

坂本 はい、ありがとうございます。

——昨年度の感想文コンテスト、本田詩乃さん(当時3年生)の「ころ」と坂本さんの「ノーと私」はとても印象的な作品でした。文才みたいなものを感じましたね。書きながら思索する…というか。独特の才能だと思います。

さて、「ノーと私」。自分が13歳だった時、私には読めなかったらと思う。漢字が読めないとかそんな問題じゃなくて、人間関係というものの理解が幼稚だったから。親と友だちと学校の先生しかいない世界に住んでいる人には、「ノー」みたいな存在はなかなか見えないんです。目の前にいても、見えない。

坂本 この本の中で、私にもわからない部分はたくさんあります。でも、この本に共感するのは、「私(ルー)」の心の動きが、私の日常の気持ちと似ているからではないかと思うのです。

——ルー。知的早熟児。すでに13歳にして高校へ通ってる。

坂本 でも、頭が良いだけで、心の成長は止まったまま。そんなルーがホームレスの「ノー」に出会うのです。「私(ルー)」に欠けているもの。「ノー」に欠けているもの。そういうこと

に少しずつ気づいてゆくルーの成長過程に、なにか自分の心にも響くものがありました。「本物の人生をノーが持てるなら、私は、本も百科事典も、服もコンピュータも、ぜんぶ他人にあげていい。」このルーの言葉がなぜか忘れられませんか。

——この夏、いちばんの発見でした。いやー、いい本を教えてくださいました。さて、お待たせしました、吉川さん。読書感想文コンクール史上、初のケータイ小説での受賞作ですが。

吉川 ケータイ小説を好んで読んでるわけではないのです。たまたま友だちから借りた本がケータイ小説だっただけです。

——おじさんにはすごく難しい小説でした(笑) 横書きが読めづらいつつとかそういうことではなくて、最初から最後までずーっと主人公・美嘉の目を通してしか話が動いて行かない。1台のカメラで撮った映像を延々と見続けているようなもので、免疫のない人には乗り物酔いみたいな状態になりますね。

吉川 そうですか。本の最後で、ヒロの日記も登場しますけれど。

——もっと早く出してきてくれ!と思いましたよ。もっとカメラ増やして、ヒロの視点、恋敵の視点、親の視点…と、もっともっと重層的に見方を増やして話に厚みをつけられればいのにと思いました。

吉川 同じく本の最後の、ヒロが描いた、美嘉～天国の赤ちゃん～ヒロの三人が手をつないでいる絵には心が温まりました。「命の大切さ」「人を信じること」をおしえてくれた本です。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2ページ目に続きます

——美嘉をめぐってヒロと優という二人の男性が出てきますけれど、どちらが好き？

吉川 私は、ヒロですね。

——今回はたいへん印象的な本2冊でした。ありがとうございます。どうですか、最近興味を持ってる本とか映画とか、なにかありますか？

吉川 私は「GANTZ(ガンツ)」。映画もノベライズ版も見たいです。

坂本 私は「借りぐらしのアリエッティ」です。

——「アリエッティ」はそろそろ湧学館にもDVDで入ってきますよ。観てくださいね。

熊谷 真純さん(2年生)「佐賀のがばいばあちゃん」 菊地 悠花さん(1年生)「邪馬台国卑弥呼」という人

——今年は、インタビューの時に必ずみんなに聞くようにしているんですけど、中学校の新校舎、どうでしょう？

熊谷 みんながあげる「明るい」「広い」に加えて、私は「生活しやすい」というのもあげたいです。校内はぐーんと見渡しが効きますし、特に、壁の窓ガラスが大きく広がったため廊下から教室一面が見渡せる開放感はすばらしいです。

——職員室も同じ造りですね。従来の、怖い先生が集まっているような壁の向こう側という「職員室」イメージががらりと変わりましたからね。

菊地 私も廊下の壁が印象的です。あと、図書室というか、図書館スペースというか。

——カギも、ドアもない図書室ですからね。私たちも、図書館の集まりなんかで、あれをなんと説明すればいいのかって悩みます。それくらい、あれは画期的な学校図書館なんですよ。北海道では、たぶん初めてじゃないだろうか。

菊地 でも、使い出したら、あの方がいいに決まっていますね。もうドアに鍵がかかった図書室なんて考えられない。

——いろいろな物事って、見方ひとつでがらりと変わりますね。なんか、「がばいばあちゃん」みたいだな。

熊谷 オール1の成績表でも、がばいばあちゃんなら「たしたら5になる」ですから。

——ああいう言葉をかけてくれる人が身のまわりにひとりでもいるということは、大きなことですよね。

熊谷 人をやる気にさせてくれる言葉ですね。子どもは「次はたしたら10になるようにするぞ」って思えるのではないのでしょうか。学校の先生が「体育以外、頑張ってるね」と言うのは普通だと思います。でも、家族までいっしょになって「オール1じゃ、ダメだ」と言ったら、子どもはやる気のひとつも出てこなくなるのではないのでしょうか。

——「卑弥呼」は、どういうところが魅力ですか？

菊地 男たちが止められなかった争い(戦争)を、女の「卑弥呼」が止めたところですよ。戦争を止めようとして、さらに激しい戦争に突っ込んでゆく男たちのどうしようもない矛盾を解決したのが、「神のお告げ」を聞くことができる女王「卑弥呼」だったというのが痛快でした。

——こちら、「見方ひとつ」ってことかな？ 権力争いとか戦争からいちばん遠いところにいるはずの人間が、じつは国の統治者として適任だったという話ですからね。

菊地 卑弥呼の死後、また男の王の時代が始まるんですけど、とたんに戦争が始まります。この国の乱れを立て直したのも、卑弥呼が死に際に自分の後継者として指名した巫女(みこ)の「いよ」でした。

——新しい校舎、新しい図書室。そして、今年は新しい本がどんどん入ってくる年です。ぱりぱり本を読んで、中学校生活を楽しんでください。



《インタビューを終えて》

京極町の読書感想文コンクールには「課題図書」がありません。小学校の1年生から中学3年まで、各自、自分の好きな本を選んで読書感想文を書きます。ですから、湧学館にとっては、コンクールは、今の小・中学生が読んでいる本をダイレクトに知ることができる大きなチャンスなのです。

「課題図書」制にすると、審査はものすごくラクになるんですけどね。でも、その分、皆さんは読みたくもない課題図書を一生懸命読まなければならない。審査するこちら側としても、本当に感動したのかどうか分からない、ただ成績が良くて文章技

術に長けた優等生が受賞を狙って書いた「良い」感想文を読まなければならない。どちらにとっても、あまり楽しい体験とは思えません。

やはり、ばらばらな価値観が混じっている京極町のコンクールの方がいい。文章がちょっと下手くそでも、選んだ本のセンスの良さで受賞ラインに入ったり…といった番狂わせがある方がおもしろいと思っています。さて、来年の「京中生インタビュー」、どんな本が飛び出してくるのかな。(湧学館・新谷)

インターンシップを体験して

真狩高校3年(京極中学校卒業生) 藤塚 典矢 (ふじつか・ふみや)

僕は湧学館で職場体験をしました。ここではお客様に本を読書してもらうために、とても細かな行程があるんだとこの職場体験実習を通じて知りました。それは本の整理、本のメンテナンス等、本を綺麗に保存・利用するための様々な作業がありました。例えば本の整理、自分自身普段何気なく利用している湧学館ですが、今回実習をするに当たって、全く別世界の湧学館が眺望出来ました。最初は解らない事ばかりでとても館員の方々に沢山迷惑をおかけしましたが、とても解りやすく指導していただいた湧学館、教育委員会の職員の方々にとてもお世話になりました。ありがとうございます。

ここからは5日間の感想を述べたいと思います。

まず1日目…。この日は、湧学館の図書館は休館日だったので、僕は教育委員会での仕事体験から入りました。主な内容は、教育委員会の担当行事、町民レクリエーション大会の準備手伝いです。僕が実習した中で、一番辛かった日はこの日だったと思います。それは、今週末に行われる町レク大会の抽選券の切り取り作業でした。なんと、1200枚もやりました。「切っても、切っても」中々減らない抽選券を切っているうちに、あっという間に1日目は終了してしまいました。

2日目…2日目からは湧学館で体験をしました。この日は開館時間が夜8時まで延長される日でしたので、勤務時間は昼から夜8時までの変則になりました。先ず最初に館内案内、図書館概論。午後は、書架返却・書架整頓→カウンター業務→図書・資料の選定→閉館作業です。この日は主に書架返却と書架整理を重点的に体験をしました。普段利用していたら書架返却・書架整頓なんてしませんから如何に大変な仕事かやって見て痛感しました。でもとてもやり甲斐がありとても達成感が味わえる内容の体験でした。そして、閉館作業をし、2日目は終了です。

3日目…そして中盤地点の3日目、この日は9時半～開館準備作業をし、開館前、職員の方々と打ち合わせをし、今日の僕の体験が始まるのでした。今日は学校の先生方が巡回に来ました。丁度、僕が本の読み聞かせをする前だったので、先生方はシュミレーションをやってくれとの事。ですが、今振り返って見



るとこの先生方のチェックがあつてよかつたと思います。それではなかったら、本番ではグダグダになっていた事でしょう。本当に感謝・感謝です。その後は、次の日が京極中学校出前図書館なので、そこで貸出するお薦め本の選定を司書の方と一緒に行いました。自分も本を選べるのでとても楽しかったです。機会があれば又やってみたいと思える仕事でした。これで3日目は終了です。

4日目…4日目はいつも通り開館準備作業を終えると、10時に中学校の出前図書館に司書の方と一緒に去了。新校舎の図書館は、以前の鍵の掛かっている図書館ではなく、とても開放的で広場みたいな図書館でした。これで中学生に沢山の本が読んでもらえると思いました。中学生の様子を見ていてもとても過ごしやすそうでした。余談ですが僕もあの新しい校舎で学びたかったです。そして出前図書館から戻った後は、納品された本と納品書の確認する検品作業を行いました。毎週木曜日に本が届くようなので、これを毎回やっている職員の方々は「とてもすごいな」と感動しました。その後レファレンスワークについての説明を受けました。レファレンスワークとは簡単に言うと、利用者の求める情報を探すお手伝いをする仕事です。そしてその後はカウンター業務に従事しました。これで4日目は終了です。



5日目…この日はインターンシップ最終日でした。今日はいつも通り開館準備作業をし、開館前の職員打ち合わせ。最終日の主な仕事内容は「京極読書新聞」8月号の記事作りです。特に大変だったのが京極読書新聞の記事作りです。何を書いたら良いのだろうか？読者の方は何を求めているのだろうか？と色々な事を考えながらこの新聞記事を考えていました。でも自分で書いた記事だけあつても達成感があります。そして最後が今までのまとめ、図書館業務のまとめです。館内の状況を自分で読んで、この5日間で学んだ図書館業務を応用して、館内での自分のやるべき仕事を組み立てる作業です。

最後になりますが、湧学館には様々な図書があります。是非町内の方はもとより町外の方も是非一度湧学館に足を運んで見てはいかがでしょうか？



◀
「ノーと私」
デルフィーヌ・ドゥ・ヴィガン
著／日本放送出版協会

「恋空～切ナイ恋物語～」
美嘉著／スターツ出版



▶
「佐賀のがばいばあちゃん」
島田洋七著／徳間書店

「学習漫画 日本の伝記4
卑弥呼」
永原 慶二監修／集英社

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

